

# 《温故館クイズ解説》

い  
衣  
～着ること～



洗濯板(せんたくいた)

たらい

「たらい」の中に、刻み目のついた「洗濯板」を入れ、石鹸をつけた布をこすりつけて洗いました。洗濯板は、片方を細かい、もう片方を大きい刻み目にしたり、石鹸を置く窪みをつけたりしました。



火熨斗(ひのし)



鏝(こて)



炭火アイロン(すみびあいろん)

炭火の熱で布のしわ伸ばしや、仕上げに使った道具

しょく  
食  
～食べること～



羽釜(はがま)

羽釜は、かまどの穴に落ちないように、まわりに鉤がついています。煮物・茹で物・揚げ物などは「鉄鍋」で調理しました。

井戸から「つるべ」で水をくみ、米を「枧」で量って「羽釜」に入れ、「かまど」で炊きます。



←鉄鍋(てつなべ)

へっつい(かまど)



火吹き竹(ひふきだけ)

竈は泥土や煉瓦などでつくられ、一方に焚口、上部に鍋・釜をかける竈口があり、その多くは、土間につくられました。

「火吹き竹」は、火を使う時に空気を送り込む道具です。一端に節を残して小さな穴をあけ、息を吹き入れて火を吹きおこしました。

じゅう  
住  
～住まいの道具～



丸火鉢(まるひばち)

「火鉢」は、灰を入れて炭火をおこし、手を焙ったり、湯を沸かしたりする暖房具です。江戸時代に陶器が発達したのち庶民の間に普及しました。

「長火鉢」は、長方形の箱火鉢で、端に20cmくらいの猫板(引き板)があります。火灰が入っている中央に「五徳」を立てて「鉄瓶」をかけ、湯茶を沸かしました。



石油ランプ(せきゆらんぷ)

「石油ランプ」は、江戸末期に伝来しました。明治時代には国産ランプが出回り、明治20年頃には全国的に普及しました。



手燭(てしよく)

室内を明るくするために「燭台」にろうそくを立てて火をともしました。「手燭」は、ろうそくを立てて持ち運ぶ移動用の燭台です。